八幡・市川本店文書ほか

両総電気株式会社関係資料

令和３年 12 月

八幡史学館チーム

両総電灯株式会社社史年表

電灯業界の変遷

＊明治5年　横浜で、日本最初のガス灯が点灯

＊明治 11 年3月25日　中央電信局開局、グローブ電池によるアーク灯を点灯「電気の日」の由来となる

＊明治16年　藤岡市助東京電灯を設立

＊明治20年　東京電灯、日本で初めて火力発電による電力供給を開始

＊明治21年　東京電灯第 1 電灯局完成、皇居に電力を供給

＊このころ　品川、横浜電灯、箱根、日光電力などが誕生

＊明治25年　京都琵琶湖蹴上発電所、営業用水力発電所始める

＊明治28年　東京電灯、浅草に交流式大規模火力発電所を建設、ネットワークを広げる

＊明治40年　山梨県駒場に大容量水力発電所を建設、東京へ送電開始

＊明治 40 年　千葉市寒川で千葉電灯

＊明治43年　木更津13番地で木更津電灯株式会社創業

＊明治末期　関東地方の電灯会社31社になる

＊明治後期～大正始め　猪苗代水力発電所、群馬、長野など東京に送電続く

＊大正始め　電力会社乱立時代迎え、市場競争へ

＊昭和始め　競争力のない会社は吸収され、大電力会社に集約されていく

＊昭和 14 年　戦線の拡大で電気事業は国家事業となる、日本発送電株式会社創立

＊昭和17年　配電統制令により9配電会社営業開始、関東配電創立

大正 2 年2月4日　創立総会（市川本店文書 A226

〃　2月　設立、資本金6万円（市原市史下巻 254

〃　7月　第1期設立総会（市川 A226

大正3年1月16日　営業開始し、八幡、五所、五井に送電を開始した。これがこの地区に電灯がともった最初である（市史 251

大正3年　（五所）発電所運転開始（設備や発電量などの詳細は未解明

大正3年3月　八幡市川家の一部（八幡町 986）を会社事務所として改造（市川 A226

大正3年5月28日　発電所員 5 月分給料（内河聞多以下9名合計 139 円

大正3年7月31日　夏季賞与（内河聞多以下 10 名合計 31 円

大正4年8月　上半期株主配当金（1 株につき年 7 分＝1株の額面は10円か

＊主要株主＝182 株111 円石川貞次郎、75 株45円重田喜代吉、旗野儀助、浪久定八、50 株30円鳥飼啓蔵、市川才次郎、山口猛、30株18円小川永司（八幡地区は20株以下安藤常太郎、竹内真金、佐倉孫三郎、小倉由太郎ほか＝領収書綴りに市川石三はない

＊主要株主は木更津電灯株式会社役員

＊木更津電灯株式会社＝明治 45 年5月25日開業（渋沢社史データベース関東電気事業と東京電力

大正4年8月　上半期役員報酬（木更津惣代小川永司分37円50銭

＊取締役30円石川貞次郎、小川永司、監査役7円50銭畑野儀介

大正5年2月　下半期木更津側持ち株7名分（惣代石川貞次郎、小川永司

＊大正4年下半期配当金（1 株につき年 7 分＝562株に対する分393 円 40 銭

大正3年3月～4年6月　領収書綴込（市川 A226＝315点

＊大正 3 年印刷の社名領収書はあて先専務取締役市川石三殿とある手書き3年5月発電所内河聞多ほか一部領収書は社長市川石三殿、4年6月以降の印刷領収書あて先は社長市川石三殿と代わる。事務所は市川宅にあり、市川石三が実質社長であったといえる

大正4年7月～7年12月　領収書綴込（市川 G2＝およそ1000点

大正5年2月　自家発電所を停止、千葉電灯会社からの買電に切り替える

＊大正 3 年、自家発電所は操業したが作るより買った方が安く、千葉電灯株式会社からの買電に切り替える。五所発電所の操業はわずか 2 年間に終わる。（市川 A226、G2

所員は、寒川、五所、平田、千種変電所に勤務、また集金業務などを担当か

＊領収証綴込＝大正3年～5年1月の火力原料コークスの仕入れは、銀座秋葉商店石炭部が87トン、東京瓦斯コークス20トン、寒川中山商店 19 トンなど合計1

26トンで、平均単価143円として総額およそ1800円、月当たりおよそ5トン、72円＋運賃諸掛であった。

＊領収証綴込＝一方、千葉電灯からの買電経費は大正5年2月が最初で103円、3月分117円20錢、4月分109円5月分109円50錢、6月分116円70錢…と続いた。五所発電所が再び稼働することはなかった(市川G2

＊千葉電灯会社＝明治40年、千葉町寒川(現在中央区新宿2-1関電工千葉の地)に設置した千葉発電所から千葉町内へ、千葉県初の配電盤による電力供給を開始したが、明治44年ごろ利根株式会社からの低廉な水力発電電力の売り込みがあり買電に方針変更した。市川で受電、千葉までの25㎞に送電線を建設、大正2年から受電した。寒川の発電機は翌年にかけて予備化、6年に廃止された。その後会社は大正12年帝国電灯に買収され、同15年東京電灯に吸収合併された。(千葉市史編さん便り№16 千葉町に電灯がやってきた

大正5年7月29、30日　千葉毎日新聞に第7期決算広告掲載
大正6年2月3、4日　〃　第8期〃
大正6年7月28、29日　〃　第9期〃
大正7年1月31、2月1日　〃　第10期〃
大正7年8月3、4日　〃　第11期〃(市川A226、G2

＊県立中央図書館ほかに明治40年～昭和15年マイクロフィルムを所蔵するが、大正元年～13年を欠落、23期以降を確認、後出

大正8年4月　姉崎町延長工事落成(市川G2)
千種変電所から姉崎地区に配電

大正9年　市川石三、成田市内で電気供給事業と路面電車事業を兼営する成田電気軌道株式会社を買収、(ヴイキペア＝フリー百科事典＝成宗電気軌道)大正13年ころ撤退か

大正11年　養老川水力発電所を計画するが同15年不許可のため撤退(市川F2-1

大正11年7月～13年2月　領収書綴込(市川F1　未解読
大正14年8月～15年12月領収書綴込(市川F5　〃
昭和3年1月～7月　領収書綴込(市川F4　主要部分解読済み

令和3年12月3日＝千葉県立図書館「千葉毎日新聞」マイクロフィルム調査

第23期決算公告(大正13年8月3日紙面)貸借対照表、損益計算、利益金分配
株金150(千円)、総収入45、総支出32、差引13、純益金8、配当金年1割
取締役社長市川石三、取締役斎藤半三郎、東條良平、石川貞次郎、小川永司

第24期決算公告(大正14年2月3日紙面)貸借対照表、損益計算、利益金分配
株金150(千円)、総収入43、総支出30、差引13、純益金8、配当金年1.2割
取締役社長市川石三、取締役斎藤半三郎、東條良平、石川貞次郎、小川永司

第26期決算公告(大正15年2月日紙面)貸借対照表、損益計算、利益金分配
株金150(千円)、総収入44、総支出34、差引10、純益金2、配当金年1割
取締役社長市川石三、取締役斎藤半三郎、東條良平、石川貞次郎、小川永司

第34期決算公告(昭和5年2月1日紙面)貸借対照表、社長市川石三
第35期決算公告(昭和5年8月日紙面)貸借対照表
第44期決算公告(昭和10年1月30日紙面)貸借対照表、株金300(千円)
第45期決算公告(昭和10年8月7日紙面)貸借対照表
第54期決算公告(昭和15年1月日紙面)貸借対照表、株金300(千円)

参考＝木更津電灯株式会社第30期決算公告(大正15年2月日紙面)貸借対照表、損益計算、利益処分方法
株金200(千円)、総収入66、総支出38、差引38、純益金2、配当金年1.1割
取締役社長石川貞次郎、取締役支配人小川永司

戦時下(昭和15年以降)、政府方針にそって東京電灯会社(現在東京電力)に吸収された。

主要関係資料

①千葉県君津郡市における電気事業変遷史(東京電力木更津営業所＝県立中央)
電気事業変遷図
千葉県内館内図(市原郡＝両総電気、小湊鉄道＝大正15年
木更津電灯株式会社　創立＝木更津電灯株式会社は、明治43年木更津13番地に石川貞次郎(木更津市長石川昌の祖父)ほか町の有力者によって資本金20万円で創立された。供給区域は木更津町、巌根村、長浦村、楢葉村、金田村、清川村(一部)、波岡村、1町6村を受け持って供給を開始した。

石川貞次郎写真

発電＝発電はサクション瓦斯を燃料とし(ガス圧によりタービンを回転させる方式)認可出力 75kw であった。

元木更津営業所長安田武司氏談「①営業開始後は配電線の具合が悪く大風で停電し、石油ランプの方がよいと巷でささやかれた。②ほとんどが 10 燭光か 16 を使用、貸し付け配線、電球、電灯 1 灯新設代は 8 円くらい

1町7村の需要家数

電灯料金(大正14年ころ

買電＝大正中期に千葉水力より 50kW、また両総電気より 20kWを、それぞれ境界点において買電していた。その後重要の増大著しく 2 号機の増設をもって

木更津変電所新設＝帝国電灯は大正 10 年から 15 年にかけて、県下の外房電気、千葉電灯、安房電灯、帝国電気、君津電灯などを合併して、千葉県の大半を傘下に収めた。木更津電灯はこの時期でも独立採算制を取り営業を続けていた。昭和 6 年に勃発した満州事変はその後、次第に国際的緊張の度を増してきた。木更津町としては海軍航空隊の誘致が決まり、基地造成のための海面埋め立ての電力供給問題が生じた。木更津電灯はこじんまりとした狭い供給区域であったが、経営内容は一番よい会社であった。そこへ降ってわいたような大口需要が出たので大変であった。この時点で木更津高柳地区が木更津地区に木更津変電所が設置された。

千葉水力電気株式会社

久留里水力電気株式会社

君津電灯株式会社＝大正 4 年佐貫町に設立。燃料はコークスの火力発電で、出力 210 馬力(157.5kW)

発電当時の思い出話「①コークスは湊港から荷馬車で運搬、②送電線異常有無を連絡する職員の待機する建物を「散宿所」といった、③余熱を利用した大浴場を近くの住民が利用

昭和 17 年 大東亜戦争勃発、国家総動員法による配電統制で関東配電の管轄下に

亀山電気株式会社

②千葉県初の配電線による電灯供給 千葉発電所

千葉県初の配電線による電灯供給＝明治40年6月千葉電灯株式会社は千葉町字寒川1222番地(現在千葉市中央区新宿 2-1)に設置した千葉発電所から町内へ、千葉県初の配電盤による電灯供給(同年末2147灯)を始めました

当時の地図での場所

現在の状況＝株式会社関電工千葉支店

明治44年ころの千葉発電所写真(出典千葉案内＝国会図書館デジタルライブラリー

大正7年ほか千葉市内地図

発電所のその後＝開業後の需要は順調で、翌年150kWの増設をしました。明治44年ころになると新規申し込みを断らざるをえないような需給状況になり、さらに300kWの増設を計画しましたが、利根発電株式会社から水力による低廉な電力の売り込みがあり、買電に方針変更しました。これは市川で受電するもので、受電設備や市川、千葉間約25㎞に送電線を建設し、大正2年から受電しました。その後会社は大正12年に帝国電灯に買収され、その3年後にには東京電灯に買収されました

③千葉市史編さんだより 千葉町に電灯がやってきた

電気以前の千葉町の灯事情

千葉電灯株式会社＝明治39年千葉町に千葉電灯株式会社の設立が計画されました。社長は紅谷四郎平＊，創立当初の資本金は5万円、発電所は現在の新宿2丁目あたりに設置して火力発電を行い、千葉県初の配電線による電灯供給(明治40年末2147灯)を行ったとされています

＊千葉町屈指の資産家。千葉割引銀行、劇場、鉄道聯隊湯誘致などにかかわる。千葉町収入役など

大正時代千葉市地図、東海新聞発起人会記事

④千葉市史、千葉県の電灯の歴史、成田の電灯電力史

市原市立八幡公民館
運営委員会広報部
発行日 令和3年11月20日
第 35 号

八幡公民館 運営委員会

八幡公民館だより

〒290-0062
市原市八幡1050－1
TEL 0436-41-1984
FAX 0436-43-7457
八幡公民館
発行責任者 安藤岩男
印刷所 千代田PTO印刷

主催事業の様子

体験活動や講義でいろいろなことを学んでいます

夏休みこども塾

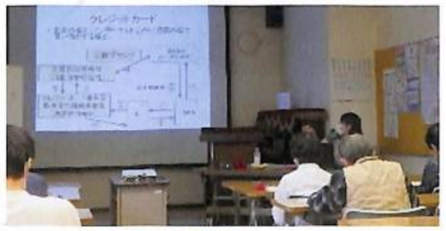
➡「勾玉づくり」

⬆「親子パン作り」
コーンカップパン

「蝉の羽化観察」

暮らしの便利帳

「海苔講座」
海苔のあれこれ



「キャッシュレス講座」
キャッシュレスの仕組み

「交通安全講座」
市原市の交通安全事情

臨時休館のお知らせ

令和3年12月28日(火)
令和4年3月28日(月)

定期清掃のため上記の2日間臨時休館とします。
年末年始の休館は12月29日～1月3日です。

図書室休室のお知らせ

令和3年11月30日(火)
~~令和3年12月27日(月)~~
令和4年1月31日(月)

市原地区成人式案内

新成人の皆様を地域社会挙げて祝福します

1. 該当者
   (1) 平成13年4月2日から平成14年4月1日までに出生した者で、次のいずれかに該当する者
   ・本市の住民基本台帳に記録されている者
   ・本市出身者等で、式典に参加を希望する者
   (2) なお、八幡中学校、菊間中学校、市原中学校、八幡東中学校卒業生を含む
2. 日　　時　令和4年1月9日(日)
   受付：午前10時30分から　式典：午前11時から
3. 会　　場　市原市民会館大ホール
4. 主　　催　市原市　市原市教育委員会
   市原地区成人式実行委員会
5. 注意事項　コロナ対策のため、新成人以外は入場できません。
6. 問合先　八幡公民館 ☎0436－41－1984

八幡宿ギャラリー

八幡宿駅橋上通路にあるギャラリーでは年間を通じて、写真・書道・木彫・はがき絵・吊るし雛・幼稚園児の描画等素晴らしい作品が展示されています。ぜひご覧ください。

サークルの紹介

秀麗会

代表 瀬尾 年枝

民謡民舞と新舞踊を学んでいる踊りのサークルです。毎月第一から三週の木曜日十時から十三時までお稽古しています。

体を動かし、振り付けを覚えることは健康にとても良く、脳が活性化します。臨海祭りや文化祭に参加し、また、ボランティア活動もしています。一緒に楽しい時間を過ごしませんか。どなたでも、いつでも見学歓迎です。

活きいき卓球

代表 日和佐 義勝

大きくて軽いラージボールは表ラバーを使用し、回転が少なく、初級者や高齢者でもラリーが続きます。初級者には、先輩方がやさしく指導します。笑いもあり、いい汗をかき、楽しめます。

生涯スポーツとしてこれからも続けていきたいです。

ふるさとの歴史 八幡公民館エリアものがたり

◆第三十三話◆

八幡で電力会社を興す ～戦前の市川石三町長

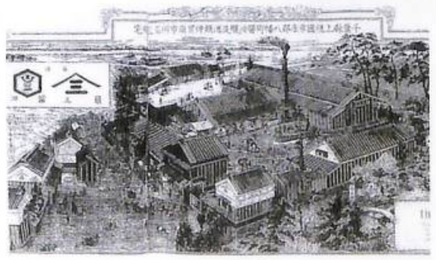
大正から昭和戦前の敏腕町長・市川石三もまた特筆すべき一人であろう。

慶応元年、神官家で老舗醤油醸造所でもあった市川甚太郎三男に誕生。明治二十三年、早稲田専門学校（大学）を卒業。大隈重信も写る集合写真が伝わる。

両親の長逝で家業を継ぐ。大正二年両総電気会社を設立、五所北川脇の現エネオススタンドの地で火力発電の電気供給事業を開始した。当初の従業員は九人、発電量は不詳。のち五井、姉崎などに広げた。石油ランプから明るく便利な電灯へ。アッという間に広がったが、戦時下の国策で東京電力に吸収された。

県内最大の千葉商業銀行、参詣路面電車の成田電気軌道、東京浅草水族館など県内外実業界で活躍、明治三十年推されて八幡町長、四十三年千葉県議二期、議長で勇退した。以後活動を地元八幡に絞り、大正～昭和前期繰り返し町長を務めた。地方自治の首領として仕事は厳しく、一方「明るくやさしいお爺ちゃん」と子孫が家庭での一面を語る。

書を能くし、ペン字の「日記帳」は達筆で難解。晩年、内田羊之助宮司と趣味の碁を囲んだ。昭和三十三年没、八幡宮日誌は「九十四歳、巨星墜つ」と記した。



（山岸弘明＝主催事業「八幡史学館」講師）
写真説明＝市川石三と「千葉県博覧図」の自宅醤油醸造所

図書室　新刊案内

一般書

- 「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー〈2〉」ブレイディ みかこ／著
  13歳に成長した「ぼく」が戻ってきた。ぼくを通して人種問題や学校内の生徒間の問題など様々な問題提起や実情がみえてきます。
- 「ミカエルの鼓動」柚月 裕子／著
  手術支援ロボット「ミカエル」と、それを取り巻く医師たちの話。天才心臓外科医の正義と葛藤を描いています。
- 「とにもかくにもごはん」小野寺 史宜／著
  子ども食堂は人の数だけ人生がある。食堂を取り巻くひとたちの生きづらさと希望を描いています。
- 「おうち避難のためのマンガ防災図鑑」草野 かおる／著
- 「季節を楽しむ大人の電車旅」「旅と鉄道」編集部／編
- 「魔の山」ジェフリー・ディーヴァー／著

児童書

- 「天の台所」落合 由佳／著（小学上級）
  家族の世話をしてくれていた「祖母」が亡くなり、家族の生活は荒れた。天は「がみババ（がみがみオバアサン）」に料理を教わり、どこか穴のあいた家族を再びむすんでいきます。
- 「うさぎのマリーのフルーツパーラー」小手鞠 るい／作
  1年生からひとりでよめる！どうぶつたちと、くだものデザートのおいしい、やさしいものがたりです。
- 「つかめ、理科ダマン1」シン・テフン／著　（小学3年生～）
- 「まっくろ」高崎 卓馬／作　黒井　健／絵　（絵本3歳～）

図書室利用者アンケート結果（10/1～10/14 実施）

回答件数　140件

1．**年代**　10代以下（22人）　20代・30代（17人）　40代・50代（25人）　60代以上（76人）
2．**男女**　男（46人）　女（94人）
3．**図書室利用頻度**　ほぼ毎日（2人）　週1～2回（55人）　月1～3回（83人）
4．**主に借りるジャンル**　雑誌（22人）　小説（97人）　絵本（42人）　その他（9人）　※複数回答有り
5．**家庭での読書時間**

6．**図書室への要望（改善策）**
- 利用者同士でおすすめ本の紹介ができるとよい。
  （図書室入口に自由に記入できるコーナーを設けました。）
- 大型絵本の用意があるとよい。
  （蔵書が15冊あります。大型絵本用の貸出袋も用意しました。）
- 図書室にない本を読みたいが。（中央図書館等からの取り寄せが可能です。気軽に窓口に相談してください。）

中高生のための名作案内 ～名作は時代を超える～

野菊の墓（のぎくのはか）
伊藤　左千夫（いとう　さちお）作。1906年（明治39年）発表。
松戸市矢切付近が舞台。15歳の政夫と2歳年上のいとこの民子との悲恋を描く。離れ離れになった後、政夫は民子が亡くなったことを聞き、野菊の咲き乱れる墓で泣き崩れる。映画化もされ、矢切に記念の文学碑が建っている。

檸檬（れもん）
梶井　基次郎（かじい　もとじろう）作。1925年（大正14年）発表。
作者の旧制高校時代、鬱屈した心理を背景に、一個のレモンと出会った時の感動を詩的に描いた作品。31歳の若さで没した作者の代表作であり、何か国語にも翻訳されている。レモンを洋書店に置いて去る最後の場面は印象深い。

蒼茫（そうぼう）
石川　達三（いしかわ　たつぞう）作。1935年（昭和10年）発表。
第1回芥川賞受賞作品。戦前の貧しい農民たちが夢を抱いてブラジルに渡り、厳しい現実に打ちのめされながらも、その地に根をおろすことを決意するまでを描く。「蒼茫」は貧しい流浪の民の意。

1月 令和3年度主催事業の募集 2月 3月

1月講座は、12月5日8:30受付開始　2月講座は、1月5日8:30受付開始　3月講座はありません

「園芸プロの技」 無料

成人 20人　農業センターで実施

プロから園芸の技術を学ぶ！

1月12日(水)　9:30～12:00

「シニアスマホ教室」 無料

60歳から75歳　抽選　20人

スマホの基礎的操作方法

1月21日(金)　13:30～15:30

「大人のパン作り」

成人10人

パン作りの基礎を学んで家庭でも挑戦！

1月25日(火)　9:30～13:00

「初級シニア卓球」

60歳以上 20人　全3回　無料

健康増進に楽しいゲームで体を動かそう！

2月7日・14日・21日(月)　13:30～15:30

「フラワーアレンジメント」

小学生から成人 28人

バレンタイン用の簡単なアレンジです！

2月12日(土)　13:30～15:00

「いろどり倶楽部」 全3回 成人30人

歴史と地学を学ぶ！バス研修は、銚子方面　抽選

①2月26日(土) 歴　　史　9:30～11:30
②3月6日(日) 地　　学　9:30～11:30
③3月12日(土) バス研修　8:30～16:00

海苔養殖の歴史

「親子で太巻きずし」 6組

小学生から中学生と保護者

伝統の郷土料理に挑戦！

ひな祭り用

2月27日(日)　9:30～12:00

抽選受付について

申込期間は、5日から11日まで
12日抽選、14日発表

結果は電話か窓口へ
お問い合わせください。

参加をお待ちしています！
詳細は、お問合せ下さい。
☎0436(41)1984

で、東京駅から中央線で長野県に輸送された。両国―お茶の水間が開通するのは昭和七年七月である。紡糸して生糸としての商取引はなかった。

明治三十七年当時市原郡には合資会社が四社存在した。

名称	業種	所在	創業	資本金
本郡合資会社	貸金業	高滝村	明治二十二年十一月	一万五〇〇〇円
合資会社美盛社	貸金業	高滝村	明治二十六年十二月	五〇〇〇円
丸肥料合資会社	肥料販売業	高滝村	明治三十三年十月	一五〇〇円
戸田倉庫合資会社	倉庫業	戸田村	明治三十三年十月	二〇〇〇円

生糸製糸工場として三工場があげられる。

名称	所在	経営者	創業	職工
錦玉社	鶴舞町	江沢信次	明治二十六年三月	男三女四五
今関製糸所	鶴舞町	今関邦次郎	明治三十四年五月	二 二七
宇田川製糸場	八幡町	小田川千次	明治三十七年六月	四 三八

明治三十七年一―十二月の工業生産の状況は次のとおりである。

品種	数量	価額
菜種油	七六〇石	三万〇三四〇円
胡麻油	一一二石	五八七四円
鍬	一四六〇個	二九四三円
笊	三万二七九〇個	二五四〇円
鎌	二五二五個	六〇六円
莚類	三万〇〇〇〇枚	一五八〇円
瓦	二万一五一〇枚	六〇三九円
雨傘	一五五〇本	三八五円

品種	数量	価額
絹織物	九八反	三五八円
絹綿交織	五八反	一一六円
綿織物	二四四反	二〇九円

醸造物	醸造戸数	数量	価額
酒類	一四戸	二二三四石	七万二九〇九円
醤油	二九戸	三五二九石	九万一七五四円
味噌	?	一四万六一五〇貫	四万三八四五円

清酒は、四〇〇石、一万四〇〇円を印旛郡・山武郡・東京府に移出し、同じく清酒を二〇〇石、八〇〇〇円を同じ仕向先を仕出元として移入している。醤油は三〇〇〇石、八万一〇〇〇円を東京府に移出し、五〇石、一五〇〇円を東京府から移入している。

その他	製造戸数	職工数	製造数量	価額
藁製品	四八五二戸	男二三四六女三八七一		二万六一六七円
瓦	一八戸	男三八女六	六三万一七〇〇枚	一万九〇七五円
下駄	一九戸	男二五	二万三六八二足	三八九六円
菓子及麺類	一九戸	男二八女五		五四八八円
切干大根	五二五戸	男六五女三六	一一三二〇貫	四四〇円
建具	一三戸	男一七	二三二六個	二〇六八円
指物類	一三戸	男一七	一四七個	一一九八円
竹製品	六七戸	男一二女五六	二万八三三五個	三〇五〇円
釣竿	二戸	男二	二〇〇〇本	一〇〇円

藁製品は、莚・叺・縄・草履・草鞋であり、竹製品は、笊・籠である。

明治四十二年、次の二工場があった。

工場	所在	経営者	創業	従業員数
安川足袋工場	鶴舞町	安川種吉	明治二十二年二月	七
時田足袋工場	五井町	時田直吉	明治三十一年二月	六(うち女二)

なお、職工の日給は、男四〇銭、女二八銭であった。

また四十二年一月、五井町に島野製糸場(経営者島野吉五郎)が創業した。四十二年一年間の製造高は、生糸五八〇貫、屑糸二二四貫、価額計三万七三三四円、汽機燃料消費高、石炭二七万斤、女工四二人、日給二〇銭であった。

明治四十三年一年間の工業は次の如くである。

	数量	価額
絹織物		
縮緬類	五二反	三七九円
紬子類	七七反	四二〇円
糸織類	四一反	二二五円
紬太織類	三三反	九四円
平絹類	一三反	三三円
絽類	二八反	一四〇円
袴地類	一四反	一〇六円
男帯地類	一五本	五五円
女帯地類	一〇本	五六円
綿織物	一四四反	一五八円
その他	九反	
計	五二七反、二五本	三四四二円

醸造業	醸造場数	生産高	価額
清酒	五戸	二二〇四石	八万三一五三円
醤油	二七戸	四八四四石	八万一五三九円
味噌	一七戸	九一四四貫	二六九九円

搾油業	製造戸数	生産高	価額
菜種油	一四戸	二二七石	七九四五円
胡麻油		四一石	一九四八円
桐実油		八石	二四〇円

味噌醸造の職工数は全体で男一、女一七、搾油業の職工数は全体で男二〇であった。

大正三年一月十六日、両総電気株式会社は営業を開始し、八幡・五所・五井に送電を開始した。これがこの地区に電灯がともった最初である。

大正四年初、鶴舞電灯株式会社が設立(資金二万二〇〇〇円)、田尾川を利用しての水力発電である。前記の両総電気と合せて二社で、大正八年当時、灯火戸数二〇六一、灯数三六一〇、益金は年一万二四七五円であった。

大正四年一年間の木製品その他の概況

業種	戸数	職工数	生産価額(円)
履物	二四戸	三二	二万二二三二円
指物	二三戸	三三	六二〇〇円
藁製品	二六三六戸	三七八五	七万八八五一円(莚・縄・叺・俵・簍)
瓦	三八戸	七六	一〇万七二九五円(生産量二二、九二九坪)

大正八年職工数一〇人以上の工場の戸数、生産量は次の如くである。

	工場数	職工数	生産量	価額
製油	一	一五		四万一六二八円

市原市史

叺莚	四戸	二万七〇〇〇円	女一四、日給四五銭
木製品	一〇〇戸	四万四〇七〇円	一三一
竹製品	一三二戸	八三六六円	
藁製品	二二二二戸	六万三三一四円	
瓦	二二戸	四万八二八〇坪	三六六八円　四六

この年、電灯会社二社、受電一六二KW、灯火用四四六一戸、八七九三灯、動力用六六台一二〇馬力であった。

昭和八年、電灯会社は一社となり、電力、二〇五KW、灯火用五一〇三戸一万五五〇灯、動力用八二戸一〇〇馬力であった。

昭和八年　会社数

種別	社数	資本金	内訳
合名	六	八万三〇〇〇円	工業二、運輸業四
合資	一五	一二万一一〇〇〇円	工業三、商業五、運輸業七
株式	六	三三七万六四〇〇円	工業一、商業三、運輸業二

同年工業の概況

業種	戸数	生産量	価額
絹織物	六戸	□（手織機一〇台職工男一女一〇）	
晒及染物	一二戸	無地物四九七反拷染物二〇六反	一五六七円（染賃）
清酒	六戸	一二九一石	一一万七二五円
醤油	二五戸	九八六七石	二八万四三四五円
木製品	一〇九戸	（履物・挽物・指物・笥類・樽桶類・木箸）	四万五〇五三円
竹製品	九四戸	（籠笊）	五〇一五円
藁製品	二〇八九戸	（莚・縄・叺・俵・簇）	四万三四四四円
瓦	二〇戸	七万九九〇〇枚	一万二七一一円

昭和十四年、会社数、合名六、資本金合計八万四〇〇〇円、合資一七、資本金合計一五万九四〇〇円、株式七、資本金合計三〇六万三九〇〇円である。

昭和十五年市原郡において清酒醸造して酒造税を納める者三人、その税額合計二万七七九七円であった。

昭和十五年　工業の概況

業種	工場数	従業員数	生産額
金属	二六	五八	三万八五一六円
機械器具	二〇	三五	三万五〇五三円
化学	七二	一二七	一四七万七一九八円
紡織	四三	一〇二	五万九三七二円
食料品	一六四	四〇一	七一万七四七一円
印刷製本	二	三	二三〇〇円
製材木製品	七八	一九五	三八万四一〇六円
その他	六四	一八〇	二〇万一八三六円
窯業土石	二八	九三	七万二六一八円
合計	四九七	一一九四	二九八万八四七〇円

大正六年（一九一七）五月、小湊鉄道が五井・小湊間六三・六キロメートルの敷設免許を得、同十四年三月五井・里見間開通、十五年九月里見、月崎間、昭和三年（一九二八）月崎・上総中野間延長開通した。当初小湊鉄道は八幡宿を起点とする計画であったが、八幡地主層の反対によって五井を起点とした。小湊鉄道の開通によって養老川の上下舟航が、大幅

に減じてその分だけ鉄道及び貨物自動車に移ったが、同時に商品集散の要衝が八幡から五井に移った。小湊鉄道は万田野砂利層の採掘権を所有しており、砂利を千葉県庁に売込むのが目的だった。なお、昭和九年省営木原線が上総中野まで開通したことによって、小湊鉄道は小湊までの延長計画を放棄することになった。小湊鉄道は設立時金三万株で安田保全社がその過半数一万六七〇〇株を所有していた。

小湊鉄道の営業状況は表のとおりで、年々低下する。不況を反映しているのだが、満洲事変（昭和六年九月勃発）の拡大によって軍需景気が全国的に浸透した昭和九年以降においても、低迷どころか下降をつゞけることは注目しなければならない。このことは市原郡山間部の商工業＝経済活動の低滞、というより後退を物語っている。

表　小湊鉄道営業状況（月平均）

	乗車客人	発送貨物トン	貨客運賃円
昭和3年	1,070	200	350
昭和4年	1,100	130	320
昭和5年	970	100	260
昭和10，11年平均	690	75	200

（『千葉県史』大正昭和篇）

高橋在久「房総の年輪」（昭和四十七年創樹社刊）によれば、昭和十二年この年より鶴舞六斉市すたれる、とある。

昭和十八年、小湊鉄道は企業整備によって、京成電鉄が経営することになった。

大正三年（一九一四）一月、両総電気株式会社（大正二年二月設立資本金六万円）が営業を開始、八幡、五所、五井に送電して市原郡の家庭にはじめて電灯がともった。また昭和二年（一九二七）九月、小湊鉄道が粟又に養老川発電所を建設した。河川落差を利用しての出力一一二KWである。これは上流々域山間部の家庭用電灯および動力源供給を目的としたものであった。電灯は数十年使用の石油ランプに代わるものとして歓迎されたが、動力源として電力を消費する工業が存在しなかった。かくて二年後の電力過剰時期に遭遇するとこの発電所は廃物となった。

大正十一年十月現在、市原郡の工場数六〇、職工数男子八一、原動機数、電動機五二、石油発動機四三、ガス発動機七（千葉県『千葉県の工業』）という状態であった。

醤油醸造業は『千葉県史』によると次のとおりとなっている。

	戸数	石数（千石）	価額（万円）
市原郡 大正二年	二七	二六	五・九
市原郡 昭和十一年	二七	五三	九・三
市原郡 大正十一年	二七	五九	九・八
市原郡 大正十二年	二七	二六	二六・七
千葉県 昭和十一年	五三一	三四七・一	八三・一
千葉県 昭和十一年	三四七	八三・一	九三七・一八

醤油を含む全工業は次のとおりである。

	大正九年	昭和十二年
市原郡	一七万円	二五万円
千葉県	六八〇万円	九〇六万円

右の中、味噌醤油等の食料品工業が全体の六五パーセントを占めている。これは他県ではみられない現象である。

醤油醸造について述べると、千葉県は他県にくらべて醸造石高はあまりだ多かったが市原郡も相当の実績をあげていた。五井町に明治三十五年七月相川が操業をはじめたとき、市原郡には相川をふくめて二二軒存在した。それが昭和十年代までつづいた。二二軒の内訳は、八幡町五、鈴木（陣屋）、小川、市川、田山、宇田川、五井町五、相川、時田、山崎、浜田、姉崎町一、川口、菊間村二、古池、中村、市西村三、土岐、酒井、斎藤、戸田村五、田中、安藤、白鳥、高山、桐谷、高滝村一、征矢であ

千葉県初の配電線による電灯供給
千葉発電所

■住所
千葉市中央区新宿2－1
■交通アクセス
京成線千葉中央駅　約200m

■千葉県初の配電線による電灯供給

明治40年（1907）6月、千葉電燈株式会社は、千葉町字寒川1222番地*1（現・千葉市中央区新宿2－1）に設置した千葉発電所*2から町内へ、千葉県初の配電線による電灯供給（同年末で2147灯）を始めました。

＊1：「千葉街案内」（M44年）による。
＊2：電気事業要覧（第2回、M43）による

これは、東京・日本橋における日本初の電灯供給開始から20年後のことでした。

■当時の地図での場所

図1は千葉電燈が電灯供給を始めてから11年後、大正7年（1918）に地元の菅沼雄吉郎が作図した「千葉市街実測図（7千分の1）」です。

発電所の位置は、中央の赤丸印で囲ったところで、電燈株式会社と記されています。また、図3の地番図からも確認できます。

この図において、街並み（市街地）以外は、畑地と水田の記号で埋められています。

次に鉄道については、上部に弓なりに走っているのは総武鉄道で、明治27年（1894）に東京・錦糸町～佐倉間が開通しました。この時の千葉駅は右上の千葉停車場でした。右側に縦に走っているのは房総鉄道で、明治29年（1896）に千葉～蘇我～大網間が開通しています。右下には本千葉停車場がありますが、県庁などの公共機関へはこの駅が至近駅でした。

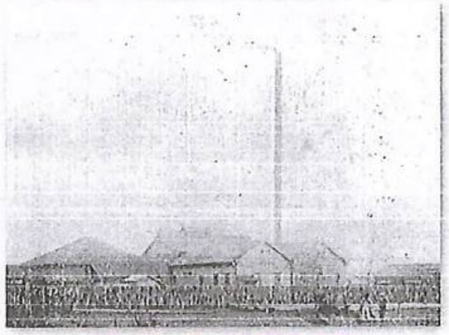


写真1　明治44年頃の千葉発電所
煙突のあるのが発電所建屋、左端が本社建屋と推測されます
出典「千葉町案内」明治44年
国立国会図書館デジタルライブラリー

■現在の状況

大正時代の地図（図1）を参考に、現在の地図（図2）において千葉発電所の位置を追うと、鉄道と千葉街道などの道路区画に注目することで「千葉発電所跡」と記した赤丸印のところになります。

図1　千葉市街実測図　大正7年発行
出典　絵でみる図でよむ千葉市図誌　上巻
千葉市郷土博物館蔵

図2　現在の地図
国土地理院2万5千分の1地形図使用

図3　大正5年（1916）発行の地番図
出典　絵でみる図でよむ千葉市図誌　上巻
和田博夫氏所蔵（千葉市立郷土博物館図版提供）

図1と比べると、海は沖に埋られ、畑や水田は市街地化されていますが、大きな変化として鉄道があります。本千葉停車場（本千葉駅）は、昭和33年（1958）に戦災復興の区画整理事業に伴い、蘇我側の現在位置へ移転し、その跡に京成電鉄の千葉中央駅が移ってきています。

千葉停車場（千葉駅）は、昭和38年（1963）に現在地へ移転しました。それまで、東京方面から蘇我方面へは、千葉停車場（千葉駅）でスイッチバックしていましたが、この移転によりストレートに行けるようになりました。また、それまでの千葉停車場（千葉駅）は、東千葉駅に名称を変えました。

現地を訪ねたところ、千葉発電所があったと思われる場所には、株式会社関電工の千葉支店があり、住所は中央区新宿2-1-24でした。

なお、建物の辺りを調べてみましたが、他県では見られた記念碑や当時を偲ぶようなものは見当たりませんでした。また、関電工千葉支店の方に、当時を偲ぶようなものが敷地内にないかをお聞きしましたが、見当たらないとのことでした。

写真2　千葉発電所跡（現・関電工千葉支店）
・北東（鉄道線路）方向から撮影
・千葉電燈の本社建物も、同一敷地内にありました。

■発電所の設備概要

・汽缶　スターリング式　1基
・発電機　3相交流、2kV、75kW×1台、GE製

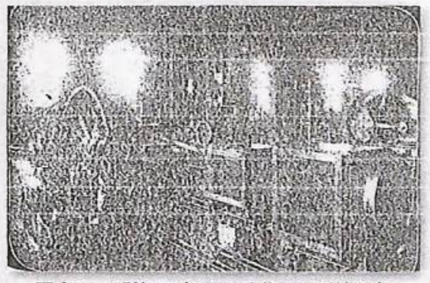


写真3　明治44年頃の千葉発電所機関部
不鮮明で、写っているものが何なのか判別の難しいところですが、大きなフライホイールがあることから、蒸気機関ではないかと思われます。
出典「千葉街案内」明治44年
国立国会図書館デジタルライブラリー

■発電所のその後

開業後の需要は順調で、翌年（明治41年）には150kWの増設をしました。

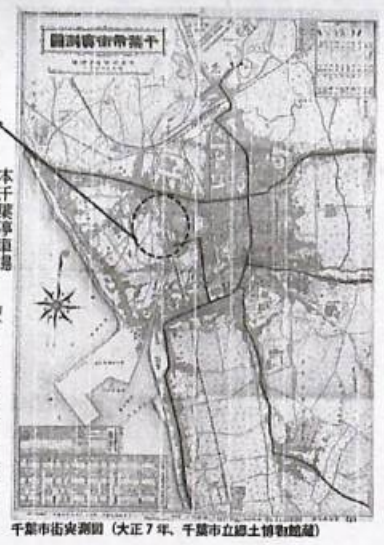
明治44年（1911）頃になると、新規申込みを断らざるを得ないような需給状況になり、さらに300kWの増設を計画しましたが、利根発電㈱から水力による低廉な電力の売込みがあり、買電に方針変更しました。これは千葉県市川町で受電するもので、受電設備や市川～千葉間（約25km）に送電線を建設し、大正2年（1913）から受電しました。

その後、会社は、大正12年（1923）に帝国電燈に買収され、その3年後（大正15年）には東京電燈に吸収合併されました。

ところで、発電所がいつ頃まで稼動していたかについては、電気事業要覧の第6回（大正元年）から第10回（大正7年）の、設備概要の変遷をもとに推察すると、大正2年から3年の間で予備化、大正6年（1917）には廃止となります。

同発電所による千葉市街への電気供給は、10年間という短い期間でした。

写真4　千葉発電所跡（現・関電工千葉支店）
南東方向から撮影



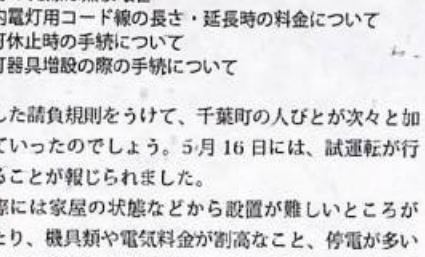
千葉市街実測図（大正7年、千葉市立郷土博物館蔵）

↘ 鉄千葉中央駅のあるところ）の裏手に書き込まれています。現在の（株）関電工千葉支店のあるあたりです。

では『東海新聞』で、その設立前後のようすを追ってみましょう。まず、明治39年1月27日掲載の「千葉電灯会社発起人会」の記事（下の写真）をみてみます。

ここでは、25日の会合で募集株数を調査したところ株数が超過し、募集を締め切った旨が書かれており、千葉電灯会社に対する期待度の高さがうかがえます。この時点では、3月20日ごろに予定された創立総会後、工事に着手し、点灯は10月頃を予定しています。

実際には創業総会は3月30日に開催され（『東海新聞』明治39年4月1日）、役員の選挙が行われ取締役や監査役(2)が決定しました。また、同日の記事には大株主の名前も記されていますが、いずれも千葉町内外の名士、そうそうたるメンバーが列挙されています。そのなかでも群を抜いて多く100株を保有したのが、社長となる紅谷四郎平でした。会社は4月9日に登記がなされ、公告がでました（右上写真）。本店は千葉町千葉542番地、設立の目的は「電灯及電力ノ供給並ニ電灯器具の販売賃付」、資本金は5万円。同年5月10日の記事では器械を購入したことが報じられ、9月にも点灯かと記されています。この時期、千葉町の人びとが、いつかいつかと点灯を待ち望んでいる姿が、投書欄に多くみられます。6月29日には、電柱建設のための測量が始まった



ことをうけ、今年中に電灯が点くことを心待ちにしている旨の投書がされています。

そんななか、同年末12月27日に千葉電灯株式会社登記事項のうち、本店の場所を移転した旨の公告が出されます。この理由については定かではありませんが、千葉町寒川1222番地に変更されました。

年内には点灯と言われていましたが、年が明けてもいっこうにその気配がなく、明治40年初めの投書欄には、待ち遠しい、二月にはきっと点灯するはずだなどの文、2月14日には「千葉町は昨今電灯の電柱をおっ立て始めた、未だ架線されない中から非常に景気が好いが愈々点火の暁には町民の脳髄も定めし一変するであらう」といったような期待感に満ちた投書が次々と寄せられていました。2月15日の公告では、一株当たりの払込金額が12円50銭から倍の25円に跳ね上がっており、創業前からその前途は明るかったことが感じられます。

人びとの思いが通じ、千葉電灯株式会社は明治40年2月7日に工事に着手した旨の記事がでました。2月16日には、「千葉電灯点火請負規則」（『東海新聞』明治40年2月16日、但し「未完」）が掲載され、下のような内容の八条が記されています。

①電灯の請負方法：半夜灯／終夜灯／メートル灯／臨時灯
②電灯器具（引込線・室内電灯線含）は当社負担、使用者から毎月損料を徴収
③装飾器具・電灯器具使用時の代価について
④弧（カ）状灯・同用炭素棒は当社負担、白熱電灯球は使用者負担
⑤白熱電灯球（当社にて購求）が15日以内に使用できなくなった際は無償取替
⑥屋内電灯用コード線の長さ・延長時の料金について
⑦点灯休止時の手続について
⑧電灯器具増設の際の手続について

こうした請負規則をうけて、千葉町の人びとが次々と加入していったのでしょう。5月16日には、試運転が行われることが報じられました。

実際には家屋の状態などから設置が難しいところがあったり、機具類や電気料金が割高なこと、停電が多いことなどで必ずしも順風満帆とはいえなかったようです。とはいえ、その後千葉電灯会社は、事業の発展に伴い3回の増資を行った結果、30万円もの資本金を有するようになりました。明治44年頃5月発行の『千葉街案内』には「…其創立当時より時運に投合したるを以て電燈電力の受容者頗る多く、忽ちにして業務の繁昌を来たし…今や千葉市全市街の燈火は悉く同会社の供給する所となり…」と記されています。一説には新規申込みを断らざるを得ないほどの需要増大があったとされ、大正3年には発電所の設備をそれまでの倍にまで増設しますが、結局、需要の増大に応じ安価な水力発電による電力を求めて利根発電からの買電に方針転換します。大正12年には帝国電灯に買収され、3年後には東京電灯に吸収合併されました（のちの東京電力株式会社）。

大正8年には、千葉町初の現場打ちの巨大なコンクリート電柱が、千葉電灯によって立てられたと言われています。これは当時でも珍しいものでした。しかし関東大震災では電柱の倒潰や引込線の断絶などによる被害があったようで、復旧には時間がかかったとされています。

残念ながら千葉電灯会社跡地には、記念碑などの往時を偲ぶものは残されていませんが、電力が何かと話題になる昨今、千葉町におけるその黎明期に思いを馳せてみるのはいかがでしょうか。

(1) 紅谷四郎平：千葉町屈指の資産家。明治32年有志とともに株式会社千葉割引銀行を設立、創立委員長・取締役を経て頭取となった。千葉電灯株式会社創立を計画し、取締役社長（就任の記事：明治39年4月7日『東海新聞』）。劇場兼楽館の設立・鉄道聯隊の誘致などに積極的に関わる。千葉町収入役・学務委員・区会議員など数々の公務にも関わる。明治25年の千葉大火においては自家所有の宅地を割き、自費を投じて開墾のうえ千葉町に道路を寄附し、この道路は紅谷横町と呼ばれた。「千葉町の功労者としても、町民一般の推称する所たり」とされる。
(2) 監査役麻生・清古はいずれも千葉町に事務所を構える弁護士。取締役に千葉町の人間として鈴木利右衛門（質商三利商店の主人、千葉町屈指の名家三河屋の分家。公共事業や鉄道聯隊歩兵学校の誘致活動などにも関わる）がいる。

◇◆この記事は新聞記事以外に以下も参考にしています◇◆
『千葉町案内』（明治44年4月刊）／『千葉街案内』（明治44年5月刊行）／『房総町村と人物』（大正7年刊）／「電気ゆかりの地を訪ねて vol.22　千葉県発の配電線による電灯供給　千葉発電所」（（社）日本電気協会　関東支部発行、平成23年）／『千葉市史　近世近代編』（千葉市、昭和49年）／『絵にみる図でよむ　千葉市図誌』（千葉市、平成5年）ほか

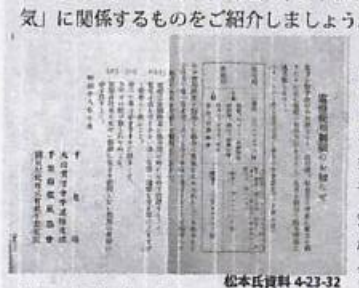
あれから70年

千葉市の戦後70年を考える

—故松本貞雄氏の資料から

戦時下の町内会事情（1）　電気の統制

前号№15でお知らせしましたように、故松本貞雄氏資料を順次ご紹介していこうと思います。この資料群には、展示で用いたパネルや写真など、さまざまな資料が残されていますが、戦時下の町内会でまわされた回覧なども多く残っています。今回は、そのなかからやはり「電気」に関係するものをご紹介しましょう。



松本氏資料 4-23-32

左の写真は昭和18年（1943）に千葉県・大政翼賛会千葉県支部・千葉県電気協会・関東配電株式会社千葉支店から出された、「電灯使用制限」についての通知です。「電力は戦争遂行の原動力」であるので節約し、戦力増強に協力しよう、と呼びかけています。戦時中は軍備にまわすため、金属の供出などが多く行われましたが、電力の節約（ひいては燃料の節約）も同じように推進されていたのです。

右上の写真は、同じく電灯に関わるものですが、こちらは防空訓練における灯火管制の方法について示した文書です。昭和14年に千葉市から出されたもので、図版も用い、部屋の広さに対する電球の大きさなど細かな内容まで規定されています。部屋から灯りが漏れることを防ぐため、電灯に笠をかけるなどして遮光するよう呼びかけています。右の写真のように電灯を青く塗り、光が下にしか向かわないようにしたうえで、取り付けた金属の絞りを閉じることで、遮光できるようにした電球も作られていたようで、灯火管制のために、さまざまな工夫が求められていたことがわかります。

松本氏資料 4-23-10

防空用電球

明治40年に千葉電灯会社が出来てから、たった30年後の話です。統制が必要なほど電気が普及していた（あるいは技術の発達により急激に電力需給が伸びた）からこその統制だったと読み取ることもできますが、戦争が国民の日常生活を圧迫したうえに成り立っていたことが如実にわかる一事例です。こうした戦時下の生活に関わる県や市からの通知・通達が、町内会や隣組単位で回覧され、周知徹底されていたのです。

平成28年度 千葉市史主催 講座のご案内

1　市史研究講座「千葉市の歴史を学ぶ」

定員200名。会場：千葉市生涯学習センター2Fホール
対象：千葉市に在住・在勤・在学の方。
全2回（1回2講演、各講演80分）。
講演1：13:30～14:50、講演2：15:10～16:30
日程及び各回のテーマ（全て現状では仮題）は以下の通り。

第1回 9/24（土） 原始古代・中世	1	猪鼻城跡を掘って分かったこと —弥生時代編—（仮） 小林　嵩 先生（千葉市埋蔵文化財センター）
	2	千葉妙見社から見る千葉氏と原氏（仮） 日暮　冬樹先生（印旛郡市文化財センター）
第2回 10/22（土） 近世・近現代	1	浮世絵を通して考える江戸と房州（仮） 田辺　昌子先生（千葉市美術館）
	2	千葉の海岸に飛行場があった！ —民間航空の開拓者　伊藤音次郎 長谷川　隆先生（元習志野市立袖ケ浦西小学校長）

＊市政だよりにて募集します。
現在の内容は仮題を含みます。後日、タイトルが変更される可能性もありますことを、予めご了承ください。

2　古文書講座

初級古文書講座

「江戸時代の村の古文書を読む」

古文書解読初心者対象。テキストは江戸時代に書かれた古文書の複写。くずし字の基礎を学ぶ講義形式の講座。
全6回。講師は小代渉先生（柏書房株式会社編集部）。
日程は5/7・6/4・7/2・7/30・8/6・9/3（いずれも土曜日）。
同じ内容で午前・午後の部の2回に分けて開催。
午前は10:00～12:00、午後は13:30～15:30。
＊市政だより（4月1日号）にて募集します。

中級古文書講座

「江戸時代の村の史料を読む」（仮）

古文書に慣れ、ある程度読める方を対象。テキストは江戸時代に書かれた古文書の複写。全6回。
講師は後藤雅知先生（立教大学文学部教授、千葉市史編集委員）を予定。日程は未定（市政だよりにて募集予定）。
＊詳しい日程は市政だより・郷土博物館HP等でお知らせいたします。
＊古文書講座初級（午前・午後とも）・中級いずれも定員は40名、会場は千葉市立郷土博物館講座室です。

【申込方法】いずれの講座も往復葉書・電子申請でのお申し込みです。
住所・氏名（ふりがな）・年齢・性別・電話番号を明記のうえ、千葉市史編さん担当までお申し込みください。
葉書の場合、一枚につきお一人のご応募となります。
電子申請の方法ほか詳細は市政だより・千葉市立郷土博物館HPにてご確認ください。

千葉市立郷土博物館　検索　CLICK!

http://www.city.chiba.jp/kyoiku/shogaigakusyu/bunkazai/kyodo/kyodo_top.html
※お申込み多数の場合、抽選となります。

問い合わせ先
〒260-0856　千葉市中央区亥鼻1-6-1
千葉市立郷土博物館　市史編さん担当
TEL 043-222-8231

千葉市民890

資料、ボム。

『千葉市史』編さんのため、古い資料・昔の写真などの情報を集めています。
ご家庭で撮影されたスナップ写真も、当時の「千葉」をみることができる貴重な資料です。
いわゆる「古文書」も大歓迎です。
聞き取り調査も行いたいと思っています。戦時中の体験、幼い頃の記憶など、千葉市域に関してお話いただける方がおられましたら、ご連絡ください。
ご提供頂いた資料、何つたお話の内容の扱いには、十分配慮致します。
皆さまからの情報提供をお待ちしています。

http://www.city.chiba.jp/kyoiku/shogaigakusyu/bunkazai/kyodo/kyodo_top.html

市史編さん便り

Chiba-shishi News Letter　NO.16　2016.3

千葉市史編さん担当
〒260-0856
千葉市中央区亥鼻1-6-1
千葉市立郷土博物館
TEL 043-222-8231

新聞にみる千葉のむかし

千葉町に電灯がやってきた!!

平成28年4月より電力自由化がはじまります。本号が発行される頃には、各家庭で「どこから」「どんな」電力を購入するのか悩まれた結果が出ているころでしょう。

正直なところ、これまで電気はスイッチを入れれば点くもの、当たり前のように供給されるものとして生活していたのではないでしょうか。電気代は払っているけれども、それだけ…質や価格が適正なのかなど、考えてもみなかったのでは？

はやいもので発生から5年が経ちますが、東日本大震災とそれに伴う一連の原発の問題は、そんな「日常」を根底から覆しました。それに加えて今回の電力自由化で、電力を「購入」して生活しているのだということを改めて実感させられました。

本号では、そんな「当然」となるまで我々の生活に密着した電気が、千葉町に登場してくる前後のようすを新聞記事から拾ってみましょう。

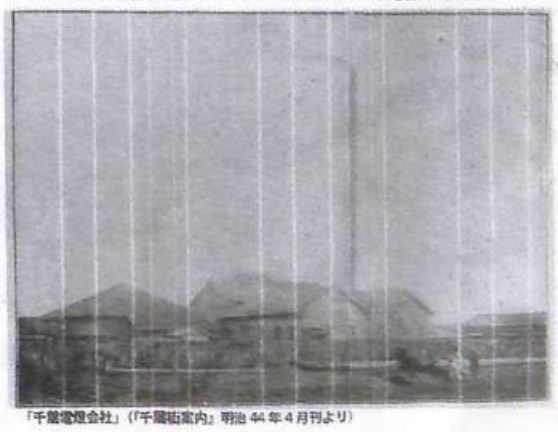
「電気以前」の千葉町の灯事情

明治5年（1872）、日本初のガス灯が横浜に設置されました。このガス灯にやや出遅れる形で、石油ランプによる街灯が、日本橋付近に設置されます。いずれにせよ、それまでの行灯などの明かりとは比べものにならないくらい明るく、まさに文明開化の象徴。しかし当時はもちろん、自動で灯りが点ったりはしませんから、日が昇った朝には掃除をし、日が暮れる夕方になったら灯りをつけてまわる「点灯屋」なる商売が存在しました。

千葉町には、町内の主要箇所に灯油を用いたランプがあったようで（千葉町のガス供給は明治45年以降と考えられます）、千葉町院内には千葉点灯社という会社がありました。千葉町の「点灯屋」です。千葉点灯社は、院内居住の林通次郎という人物が、明治30年に創業したとされています。千葉点灯社については、詳細はわかっていないのですが、明治40年1月1日の『新総房』広告欄には、「謹賀新年　千葉点灯光盛舎　林通次郎」との広告（左）が掲載されています。この年、ライバル会社の名古屋点灯会社と競争をし、経営上の勝利を収めたとされており、同年9月8日の『東海新聞』投書欄「於千葉集」にも、このことを示すと思われる投書（「千葉町点灯会社の競争は…頗る良いことだ、為に町は明るくなり文明らしくなる…」）が載っています。新聞の残存状況により、前後の記事で確認することはできないのですが、恐らくこのライバル会社との競争については記事（あるいは投書）となり、千葉町の人びとの関心を集めていたのでしょう。しかし、点灯屋は大正期に入り、電灯が普及していく中で次第に衰退していきました。

千葉電灯株式会社

千葉点灯社が広告を出した前年の明治39年、千葉町に「千葉電灯株式会社」の設立が計画されました。社長は紅谷四郎平(1)、創立当時の資本金は5万円、発電所を現在の新宿町2丁目あたりに設置して火力発電を行い、千葉県初の配電線による電灯供給（明治40年末で2147灯）を行ったとされています。下の写真は、明治44年頃のようすです。煙突があるのが発電所建屋、左が事務所建屋と考えられます。大正10年の「千葉市街実測図」（裏面に掲載）では、「千葉電灯株式会社」として本千葉停車場（現在の京成電



「千葉電燈会社」（『千葉街案内』明治44年4月刊より）

東京電灯(株)『東京電灯株式会社開業五十年史』(1936.08)

基本情報　目次　索引　年表　資料館

会社名	東京電灯(株) Tokyo Dento Kabushiki Kaisha
書誌事項	東京電灯株式会社開業五十年史 / 東京電灯株式会社編　[13790 / A189] 東京：東京電灯：1936.08 15, 269, 20p, 図版；27cm Tokyo Dento Kabushiki Kaisha kaigyo goju-nenshi 参照タイトル: 東京電灯株式会社開業50年史；奥付の編纂者: 東京電灯株式会社新田宗雄；印刷: 共同印刷；折込み図8枚；非売品；綴じみ
各種ID	『会社史総合目録 増補・改訂版』一連アイテム番号：3889 / 『主要企業の系譜図』図番号：27-1；22-1；7,1-4；15.3-7
所蔵リンク	NDL ONLINE　/ NDL Search　/ CiNii Books　/ Worldcat　/ 社史ウィキ　/
会社沿革と社史メモ Company and Shashi Overview	明治初期工部大学校の英国人教師及び学生は海外雑誌などから電灯の実用性を知り、実業家に電気事業創設を提案。1882年矢島作郎、大倉喜八郎らは東京電灯会社の設立を出願。翌年許可され1886年一般営業を開始、東京に火力発電所を建設して1888年電力供給を始める。渋沢栄一は設立に尽し尽力し、1888-1891年に役員を務める。50年史は設立からの沿革、現況、資料編から成り、写真・図表を数多く掲載している。[1942年配電統制令に基づき甲府電力、富士電力、日立電力とともに新設合併し、関東配電を設立。]